

都道府県高等学校野球連盟  
審判委員の皆様へ

日本高等学校野球連盟  
審判規則委員会

### 「甲子園から全国へ・・・2017 年春」

#### 第 89 回選抜高等学校野球大会を終えて

今年の規則改正で「野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの個所に踏み込んだ場合、塁上の走者に 1 個の進塁が許される」という改正がありました。甲子園球場でも過去にベンチやカメラマン席に踏み込んだり、倒れ込んだりするというケースは度々発生しており大会前に改めて確認し、試合に臨みました。皆さんもそれぞれの球場のベンチをはじめとするボールデッドゾーンを試合前に確認されていることと思います。また、2017 年の重点指導事項である「礼に始まり礼に終わる」については、大会前の監督会議、キャプテン研修会、そして攻守決定時の指導の効果により、両チームが球審の「礼」の掛け声に合わせて同時に礼が実行されました。しかしながら、マナー面で今後注力して取り組むべき事項、ルール of 適切な適用という課題も出た大会でありましたので、その幾つかを振り返ってみました。

#### 1. マナー面での課題

##### (1) 一塁ベースコーチが「セーフ」のジェスチャーをする行為。

当行為を慎むことは、大会前の監督会議、キャプテン研修会でも説明していました。打者走者の全力疾走、ヘッドスライディングに対する自然な行為で、決して審判委員を愚弄する意図ではないことは理解しますが、ベースコーチの役割が打者または走者に指図する(定義 6)ということをも十分説明しておく必要があります。特に高校野球では、ベースコーチが特定の選手に限るということはありません。同行為を看過せず継続的に指導していきましょう。

##### (2) 外野飛球でアウトになった打者走者が走り続ける行為。

既にアウトになったにも拘らず、二塁、三塁へと全力疾走する選手が散見されました。選手に対し、「常に次の塁を狙っての走塁」と指導もありますが、アウトと認識したならば即座に走路から外れるべきです。また、塁上に走者がいる場合も守備側の惑乱を招いたり、打者走者自身が送球に当たる恐れなど、安全面でも問題があります。

#### 2. ルール適用上での課題

##### (1) 「タイム」宣告の時期。

「審判員はプレイの進行中に“タイム”を宣告してはならない」ことが原則ですが、例外事項の 1 つとして、突発事故によりプレーヤーがプレイできなくなったと判断された場合があります。プレイを止める訳ですから、よほどの突発事故(例えば、野手がフェンスに激突して動かない、送球が走者の顔面に当たり倒れ込んだ、など生命にかかわるような事故)に限られることになります。また、選手からのタイムの要求に応じて、即座にタイムを宣告することも熟考が必要と考えています。

##### (2) 同一イニングでの投手交代。

投手は同一イニングで二度目の投手に戻れば、それ以降は他の守備位置につくことはできません。(高校野球特別規則 9 では、投手→野手→さらに野手への交代は認められる)。今大会で、二度目の投手について選手が他の守備位置につくという事象を発生させてしまいました。この教訓から、幹事、控え審判委員との連携強化、選手交代時のサインの確認を行い、試合運行にあたりました。

昨春、「指導力・観察力にも一層の磨きをかけ、グラウンドティーチャーとしての自覚を持つ」ことを共通課題に掲げました。上記事項から、更にグラウンドティーチャーとしてルールの熟知、的確な判断と適用を共通の課題として、共に研鑽して参りましょう。

以 上